
墮天使の暗殺者

ぬほほほっ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕天使の暗殺者

【Nコード】

N7653Z

【作者名】

ぬほほっ

【あらすじ】

遙か昔に熾天使ルシフェルは、とある理由で神に反逆した。それから数千年後、とある理由で神と魔王は相対した。そして反逆した理由は・・・ 原作ブレイク上等！！の100%で構成されてます。嫌な方は戻るをオススメします。

プロローグ

全てが氷によって造られ全てを凍らせる地獄、氷結地獄。

そんな場所にある檻の中で、プカプカと宙に浮かびながら優雅に本を読んでいる男性がいた。

男性の髪は銀色で腰まである長髪で、白をメインに赤と黒のラインが入ったロングコートを羽織り、同じく黒のズボンをはいて手には鎖の付いた手錠をしていた。

しかも場違いに全てが冬用ではなく、夏用の薄いデザインである。

「ふむ、やっぱり人間の^{別世界}世界の読み物は面白いな。」

男性は上向きから、うつ伏せになり新しい本に取り替える。

本は地面に無造作に置かれていて、全て凍り付いている。しかし、男性が触った瞬間に、初めっから凍ってなかったかのように、新品同様の本になった。

「ちよくちよく此処から抜け出してたけど、最近^{別世界}は抜け出してないな・・・また抜け出すか？最近の人間の^{別世界}世界を見てみたいし」

「そんな事をしてたんですか・・・よくこの地獄から出られますね」

男性が独り言を呟いて読んでいた本を閉じた時に、金髪を腰まで伸ばして首の後ろで纏めている女性が突然現れた。

「おお！ミカエルちゃんじゃないか？わざわざ俺の為に胸を揉ませに来てくれたのかい？」

男性がニヤニヤしながら女性・・・ミカエルに近付く。

「ルシフェルさん！」

ミカエルが顔を真っ赤にして怒鳴る。

「おいおい、俺をその名で呼ぶなよ。俺の事は親しみを込めて墮天^{ルシフ}使^アもしくは、魔王^{サタン}と呼びなさい（笑）」

男性・・・ルシフェルはちよつと怒ったように言い、最後に檻から手を出してポンとミカエルの頭においた。
そして、チラツと女性の胸を見た。

「それにしても全然変わってないな。何千年もたってるのに貧乳だな」

そして男性は落胆した表情をした。

「コレは貴方のせいでしょう！！」

ミカエルは涙目になり、上目遣いで睨んだ。

「からかっただけだよ。さっきの答えだけど、俺の属性は光と火だからな。氷や冷気に対して火と熱気で抵抗してたからな。初めは辛かったけど、馴れれば平気だ。何千年此処にいると思ってんだよ・・・んで、どしたの？」

ルシフェルは固まっている身体を軽く動かしながら話す。

「あ・・・はい。主達がお呼びです」

顔を真っ赤にしていたミカエルは、すぐに自分が何故此処に来たのかを思い出しルシフェルに告げた。

「主？・・・ああ、ゼウスの爺さん達か。まだ生きてたのか。そろそろ新しい神に座を譲れよな」

ルシフェルは少し考える素振りをしてから、思い出したようにポンと手を合わせた。

それからブツブツと文句？を言い始めた。

「わかった。少し待ってくれ」

ルシフェルは身体に付いた氷を落としてから牢屋を出た

side・ルシフェル

今氷結地獄から天界に向かって上昇中だ。

それにしても、ずっと無干渉だったのに、いきなり呼び出したと？何でだ？

西暦6世紀の時に、遊び半分であるとある国の王に精霊として剣を与えた事か？

別世界人間の世界に行った時にキリストと名乗って殺されてフリして帰ったからか？

まさか信者達が墓を掘り返すとは思わなかったZE！

それとも紀元前にとある帝国の皇帝をそそのかして暴君にした事か？やっぱりあれか？

最初の人間の男女のアダムとイブに禁断のリンゴを食べさせたから

かな？

沢山ありすぎて解らん（笑）

「なあ、俺って何で連行されてるの？まさか神に反逆した事じゃないよな？」

兎に角、ミカエルちゃんに聞けば解るだろう！と思ったので聞いてみる。

「多分その事です」

「今更！？何千年前の事だよ！それにもう魔王サタンとしての行動は公認だと思つてたよ！」

あの糞爺！

俺を氷結地獄に墮とただけじゃ気が済まないのか！？

「正確には貴方を呼んだのはゼウス様ではなく、アルテミス様です」

アルテミス？・・・ああっ！俺の妻ダイアーナか！

神って名前が複数あるから面倒なんだよな。

アルテミスとしては処女神として崇められてるけど、ダイアーナとしては俺との間に、魔女の女神アラディアとその他の万物を創つたつてなってるし・・・矛盾してるよな？

「あとアラディア様も会いたがってます」

嫁と娘は女神だけど、俺は天使ってマジウケる（笑）

一応俺も天使に分類されてるけど、神でもあるんだよね

「そう言えば、ずっと会ってないな」

「氷結地獄に行く事を禁じられてますからね」

「正確には氷結地獄に來たら活動できないからな。禁じられてるんじゃないくて、行けないだけだよ。」

「私は来れましたが？」

「それはミカエルちゃんが、火を司る天使だからだ。無意識に凍っても瞬時に火で溶かしてるからな」

「なるほど、だから身体が鈍いんですね・・・着きました。」

ミカエルちゃんと話しながら飛んでたら、天界の神の神殿に到着した。

飛んでる最中、手錠がジャラジャラうるさかったな。

「・・・手錠外せよー」

「貴方は危険人物なんですよ？外せるワケないじゃないですか」

正論を言われてしまった。

でも、手錠ってかなり痛いんだぞ？

「・・・墮天使ルシファーを連行してきました」

ミカエルちゃんが神との謁見の間の扉を開いて中に入ったので、俺も続いて中に入った。

謁見の間は円形になっていて、12の柱があり、その前にゼウスの

爺さん達が座っている。
俺は謁見の間の中心まで進む。

「うむ、ミカエルはもう下がって良い」

「はっ！」

ゼウスの爺さんが ミカエルちゃんを退室させやがった。
ミカエルちゃんが出て行った後、12の神が俺を見てくる。

「神反逆以来だな。墮天使ルシファーよ」

ゼウスの爺さんが代表として話すみたいだ。

「御託は良いから、俺を呼んだ理由って何だ？まかさ魔王サタンとしての行動に文句を言う為に呼び出したんじゃないよな？」

不適に笑いながら、ゼウスを睨む。

「当たり前だ。魔王サタンとしての役割は我等が与えたようなものだ。今更何も言わん！」

だろうな。

敵対されるつてのは、自分達の娯楽の一つでもあるんだし・・・実力も互角だからな。

それに悪魔達を纏める人物も必要だとも感じてるはずだ。

「とある理由で、墮天使ルシファーや魔王サタンのままで、熾天使ルシフェルに戻ってもらおう
と思っているのだが・・・いまだにあの信念のままなのか？」

何を言ってるんだ？

一度俺から奪ったルシフェルの名を俺に戻すだと？

それにあの信念か・・・

「当たり前だ。あれから一度も揺らいだ事さえない！」

凜ッ！と胸を張って言い切った。

「何を言ってるのよ！あんなのが揺るがない信念？ふざけてるの！」

「うおっ！」

ゼウスの爺さんと話してたら、アルテミスが割り込んできた・・・それにしても貧乳だな。

「ふざけてないさ。俺は全ての者にオパーイの素晴らしさを教えるんだ！」

握り拳を作って、アルテミスを真っ直ぐ見て言った。

そしたらゼウスの爺さんは、頭痛がするのか頭を押さえた。

アルテミスには睨まれて、ポセイドンは苦笑いをされた。

他の神はポカーンとした表情をしている。

「彼はそんな事の為に反逆したのか？」

12神の1人が呆れたように言う。

そんな事とはなんだ！

「ああ、コレを知ってたのは私とポセイドン、妻のアルテミスの3

人だけだった・・・これは最高機密だ」

「そんな事天使達に言えないからな」

ゼウス、ポセイドンの順で話した。

何で俺の反逆理由が機密なんだよ！

俺がオパーイ教を広めようとしたら、全力で止められたし。

そして反逆したら氷結地獄に墮とされたんだよな。

今では良い思い出だ（笑）

「そんなに嫌なら俺を選ぶなよ」

俺はいい加減鬱陶しい手錠を力任せに引き千切って外した。

「少しややこしい事だからな。天使達に任せる事が出来ないんだ」

「天使に任せられない？天使は神の雑用係だろ？」

「嫌な言い方をするな」

ポセイドンに苦笑いをしたが言われた。

全員が気まずそうな表情になった。

天使達に言えば、喜んでやりそうなんだけど・・・特に下級の天使達は神からの直々つてので。

「結局、どんな内容なんだよ？」

「下級の神が勝手に転生者を送ってしまって、世界が滅茶苦茶になつてしまった」

「あ〜、それはご愁傷様」

確かに下級の神だろうとも、天使が神の転生者を始末できないからな。

始末したら、一応反逆にもなるからな。

「そこで貴様の出番だ。貴様なら問題ないだろう？」

確かにそうだな。

俺はもう反逆したし、殺しても悪魔だからで問題無い。

だけど、墮天使・魔王ルシファーだから手伝う義理がない・・・そこで熾天使ルシフェルの名を戻す。

でも、俺に熾天使の名を戻したら、今までは魔の力だけだったけど聖の力も得るから、かなりパワーアップするけど大丈夫か？

「一応転生者つてのを考えたのだが・・・本末転倒な気がして止めた」

「なんか解る気がするわ。まあ、良いよ。その代わりに、力寄越せ。人間を眷属に創り替える力と正常にする力の二つで良いから」

「それぐらいなら問題ないだろ。眷属にしてもお前の恩恵を受けられるくらいだぞ？」

「OKOK。全然かまわないよ。その方が育てる意味がある」

眷属にしたらパワーアップしましたじゃ、つまらないからな。

「それから連れて行ってほしい者が天使いる」

「あれ？さつきと言ってる事が逆だぞ？」

さつきは天使だから無理だつて言ってたよな？

天使が転生者を殺したら、神の行いを否定する行為だから無理って事じゃなかったのか？

「その者はちよつと特殊なんだ。墮天使と天使の子供なんだ。ハイだから行く場が無くてな。だから色々経験の為にな」

「・・・今更だけど神と魔王が密会とか良いのかね？」

「「「「・・・」」」」

12神全員をグルつて首だけを回して見る。

そしたら全員無言で目を逸らされた・・・おい！

「アリス、入って来い」

「はい」

ゼウスの掛け声で小麦肌で金髪の女性が入ってきた・・・巨乳だ

「・・・良い胸だ」ボソツ

「あゝ ああ？」

ヤベツ！

今の眩きがアルテミスに聞こえてたみたいだ。
椅子から乗り出して睨まれた！

「そ・それじゃあ、頼んだぞ？」

「あいあい」

ゼウスが少し焦りながら言ってきたので、俺達は振り返らずに謁見の間から出て、直ぐに人間別世界の世界に降りていった・・・アリス無言だったな。

キャラ設定(前書き)

天使の階級

上位三隊

熾天使

智天使

座天使

中位三隊

主天使

力天使

能天使

下位三隊

權天使

大天使

天使

キャラ設定

ルシフェル・S・ルシファー^{サタン}

容姿

顔は中性的で、髪を長くすれば女に見え、短くすれば男に見える。体を赤ん坊から老人まで変化自在なので、特になし。好む身体は子供サイズで132cmで、大人なら188cmである。

ルシフェル^{サタン}、ルシファー^{サタン}、墮天使の三つの戦闘スタイルに切り替える事が出来る。

熾天使と魔王の力は一緒だが、熾天使だと神に権利の関係で勝負にもならない。

しかし、魔王だと互角に戦える。

墮天使だと神殺しが出来る。

得意な属性は光と火だが、他の属性も使えなくわない

アリス

容姿

顔は上の上で道端ですれ違ったら振り返るほど。身体はモデルみたいに引き締まっていて、出るところは出ている。外見年齢は18歳くらいである。

天使としての実力は中の下の能天使並である。

得意な属性は水と闇で、武器は槍と 刀である。 の中には短や長、双などが入る。

要するに刀が付けば何でも良い。

キャラ設定（後書き）

因みにラカンの強さ表では、

上位三隊

熾天使・

智天使・

座天使・

中位三隊

主天使・

力天使・

能天使・

下位三隊

権天使・

大天使・1万5千

天使・1万

ミカエルが大天使クラスとされているので、ミカエルよりもしたかな？っと思って設定しました。意見などがあれば、よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7653z/>

墮天使の暗殺者

2011年12月26日08時54分発行